

豊かな感性を育む劇づくり

— 中学年「力太郎」の実践を通して —

伊藤 福男

1. 子どもの感性と表現活動「劇あそび」

子どもは、お話しの世界が大好きである。何度も聞いているお話しも「もう知っているよ。」とは言わなく、まるで初めて聞くように胸をわくわくさせながら「早く、読んで。」とせがむものはある。大人になるにつれて「もう読んだから。あらすじを知っているから。」と一度読んだものは読まなくなる。

子どもにとって昨日読んでもらった「桃太郎」と今日読んでもらう「桃太郎」は、違うものであり、新たに感動するものであると考える。実際お話しを読んでいるとこわい場面になると知っているのに「こわい。」と言って大人の背中に隠れたり、こわい場面が終わるとニコニコして顔を出したりすることがよくある。お気に入りの登場人物の言葉をなりきって声を出したり、身ぶりで表現する子どももいる。子どもは、人や物や事象に対して日々新たに感じる心を持っているのである。

また、子どもは、お話し「劇あそび」が大好きである。登場人物になりきって身ぶりや動作で表現しているが、よく見るとその表現の仕方は、決して同じでなく、毎回その子どもがその時感じたもの気づいたことを表現している。

「劇あそび」は、一人一人の子どもが身ぶりや表情、動作、ことばなどによる表現活動を活発にすることも目的であるが、先に述べた子どもの感性、すなわち人や物、事象に対して「気づく」「感じる」「表現する」ことが自然に現れる活動である。その子どもの感性を受けとめ、支援していくことにより、さらに豊かな感性を育む方途を考えていきたい。

2. 指導事例「ちからたろう」

(1) 題材について

本学級の児童は、これまで週1回の「おはなし（養護学級合同の国語）」でお話しの読み聞かせのあと、劇遊び（「3匹のこぶた」「3匹のやぎとガラガラドン」「ブレーメンの音楽隊」）をおこなっており、劇づくりには親しんでいる。

本題材は、総合学習「クリスマス会」の中の学習活動として展開した。劇の題材を選択するにあたっては、

- ① 児童一人一人がそれぞれの段階に応じて理解しやすい内容であること
- ② 児童の興味・関心のもてる活動が設定できること
- ③ 児童の個性を生かせる配役ができること

の3つの観点から設定した。本題材では、児童が楽しみながら活動ができ、児童相互の関わりができるように配慮し、児童の実態に合わせて内容を少し変更した。(図1)

(2) 児童の実態

本学級は、3年生3名、4年生3名の計6名の学級であるが、お話しの理解や表現方法において一人一人様々である。

劇づくりに関しての実態と児童の感性については、表1の通りである。

(3) 指導目標

- ① 劇の中ですすんで表現しようとする意欲を育てる。

② 道具や音楽を手がかりに自分の役割を演じることができるようになる。

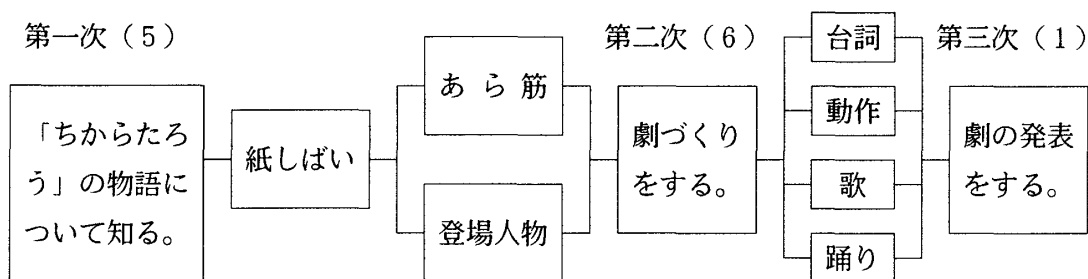
表1 児童の実態と感性

児童	実 態				感性について
	理 解	表 現	か かわ り	興 味・関 心	
⑦	登場人物がわかる。場面の状況がわかる。	自分のしたことを二語文で話す。	友だちの動作や言葉の模倣してかわる。	テレビを見て変身したり、強いものが好きである。	感じたことを自分の好きな方法ではたらきかける。
⑧	紙芝居を見て知っている物の名前を言う	次に何をするか単語で言える。二語文で要求。	学級の友だちに関心を持ち始めている。	変身ポーズが好き。大人と遊ぶのが好きである。	単発的にはたらきかける。
⑨	絵本を見て好きな物の名前が言える。	してほしいことを単語で要求する。	かかわりは大人が中心である。	音楽が好きで歌詞の一部やメロディを口ずさむ。	対象を感じ、受け入れる。
⑩	あらすじを追ってお話しをする。	昨日の事などを順をおってわかりやすく話す。	高学年として低学年の子どもに教えたりする。	行事等に期待を持ち、興味を持って取り組む。	自分なりの表現を工夫する。
⑪	あらすじを追ってお話しをする。	昨日の事等を言葉や身ぶりで表情豊かに話す。	高学年として低学年の子どもに教えたりする。	行事等に期待を持ち、興味を持って取り組む。	相互関係の中で、はたらきかけ合いながら表現できる
⑫	登場人物を順にお話しをする。	友だちや自分の絵を描いて沢山お話しをする。	特定の下学年の女子によく話かける。	絵が大好きで人や行事の特徴をとらえて描く。	友だちや教師の模倣をして表現する

(4) 指導内容と計画

総合学習

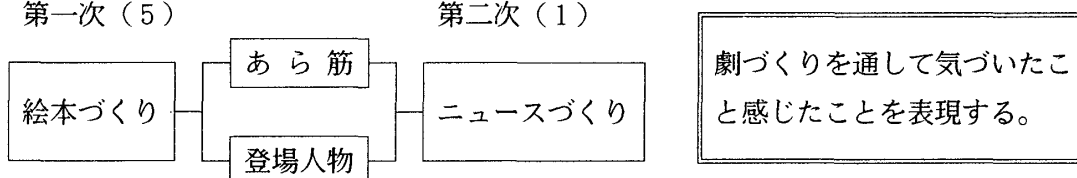
第一次 (5)



国語科

第一次 (5)

第二次 (1)



以上の指導内容と計画のように総合学習と国語科で同時に平行して授業をすすめる方法をとった。総合学習では、児童が実際に本題材「力太郎」を主に身体で表現をする場、国語科では、言葉や文字による表現する場として設定した。なお、国語科の絵本づくりは、総合学習の第二次と同じ時期から始めたことにした。学習にあたって児童自身の「気づき」や「感じる」表現するを教師自身が受けとめながら教師の支援のあり方について探ることとした。

(5) 指導の実際

総合学習の指導の実際を述べたい。

① 第一次 「ちからたろう」の物語の学習

ア 学習の内容

劇づくりへの導入としてはじめにアニメの「ちからたろう」を視聴し、2時間目から自作の紙芝居により物語の学習を行った。紙芝居を作成するにあたって登場人物をイメージしやすいようにまた、児童が言いやすいように名前を一部変更した。また、なまけもののおじいさんとおばあさんを働きものにしたり、ばけものが終わりに改心して一緒に楽しく過ごすようにして劇の最後にみんなで楽しく踊れるように一部改作を行った。

紙芝居の登場人物は、次の通りである。()は、原作の名前。

おじいさん、おばあさん、ちからたろう、いえたろう(みどっこたろう)、いしたろう
おひめさま(庄屋のむすめ)、おかあさん、おに(ばけもの)

紙芝居の場面は次の通りである。

第1場面	貧しいおじいさんとおばあさんが泥で人形を作り、ちからたろうの誕生場面。
第2場面	大きくなったちからたろうが旅にでる場面。
第3場面	いえたろうに出会い、相撲で力比べをして、ちからたろうが勝つ場面。
第4場面	いしたろうに出会い、相撲で力比べをして、ちからたろうが勝つ場面。
第5場面	おひめさまとおかあさんがおにがでると泣いてちからたろうに話す場面。
第6場面	ちからたろうたちがおにと相撲をして力くらべをしている場面。
第7場面	おにが負けて仲良くしようと仲直りをしてみんなで楽しく遊ぶ場面。

イ 児童の様子

児⑦	紙芝居を「おにが出るよ」「おれこれにきめた(役)」と言いながら熱心に見ていた。
児⑧	「おすもうはっけよい」「のこった。のこった」を聞くと笑顔になり見ている。
児⑨	教師の声かけで紙芝居の絵に注目をしていた。
児⑩	1回目から「誰が出てきた」の問いかけにあらすじをとらえて言った。
児⑪	楽しそうに動作を交えて紙芝居を見たり、あらすじを追って登場人物を言った。
児⑫	繰り返し見るにより、「おにこわいよ」といったり登場人物を言ったりした。

紙芝居を読んだあと、劇あそびを毎時間行った。役は、児童の希望の通りにしたが、何回かするうちに児童も自分のやりたい役が次第に固定化していった。劇あそびをしながらあらすじを理解することをねらいにした。

② 第二次 劇づくり

配役を決めるにあたり、劇あそびで児童の様子から一人一人の児童がもっともイメージできて、表現しやすいことを考えて設定した。

ア 学習の内容

台本をつくるにあたっては、紙芝居を見ながら物語のあらすじや登場人物を理解して児童の方から出てきた言葉や、日常生活の言葉から一人一人の児童が自然に言える言葉をそのまま選び、台詞として取り入れた。

一人一人の児童が、自分の役をイメージを持ってそれぞれの役になりきって表現できるように劇づくりの第1時間目から衣装や役に必要な小道具を持って学習するようにした。ちからたろうの児童には、クッションでつくった金棒、いえたろうには、段ボールで作った石、おばあさんには、どろたろうに見立てた人形、お姫さまは着物を着て、おにには金棒と角といった小道具や衣装である。

それぞれの役が登場場面では、児童が意欲をもって登場し生き生きと表現できるように一人一人にあったテーマ音楽を設定した。自分の台詞だけでなく相手の動きや台詞に合わせて表現する児童には、日本昔話しや効果音楽としたが、登場場面のタイミングがつかめにくい児童には、日頃大好きなアニメのテーマやテンポの早い童謡にした。

また、児童が劇づくりにむけてながれがつかめやすいように台詞と音楽を入れたテープを作り、最初の3時間は、テープを聞きながらセリフを言ったりや動作をするようにした。

イ 児童の役と学習中の様子

児 ⑦	ちからたろう	強いヒーローにあこがれている本児は、とても意欲を持って取り組んだ。一緒に旅に行く場面では、「大丈夫僕は一人で行く。」や最後におにと仲直りするのに「だめ」と言ったり本児らしさを表現していた。劇づくりが進むにつれて「よし、行こう」「いいよ」と本児から言うようになった。
児 ⑧	いしたろう	「劇をするよ」と自分から籠の中の衣装を取り出し早くから着て劇を心待ちにしていた。初めは、マイクに「うー」と言って遊んでいたが、自分から「いしたろう」「まいった」「つれてって」の台詞が大きな声でいえるようになった。また、自分の登場の音楽に合わせて楽しく踊った。
児 ⑨	村のむすめ お姫さま	指導者の言葉をくり返したり、児⑩と一緒に動作をすることが多かったが、本児の登場場面は、ニコニコして踊った。クリスマス会の当日、体調が悪くぐずっていたが、始まりの日本昔話の音楽がなると機嫌がよくなり、自分の出番まで舞台の袖で待ち、いつもの踊りができた。
児 ⑩	いえたろう	自分だけの動作や台詞だけでなく、他の子の動きにも注意をはかり、流れをつかんで表現することができた。ちからたろうに相撲の勝負を挑む場面では、とても大きな声で名乗りをあげたり、相撲することができた。登場場面の「どすこい体操」は、シコを踏んで生き生きと踊った。
児 ⑪	おじいさん おに	自分だけの動作や台詞だけでなく、他の子の動きにも注意をはかり、援助したりしながら表現することができた。おにの登場場面では、観客の児童がこわがるくらいの演技をし、ちからたろうとの勝負では、顔を真っ赤にして相撲をしたが、負けるタイミングもつかんで表現した。
児 ⑫	おばあさん おかあさん	初めは自分の動きや台詞のタイミングがつかめなかったが、次第に流れもつかんで、相手の台詞もよく聞いて表現することができた。特に泥人形が子どもに変わる場面では、ひっくり返って驚く演技をした。児⑨と一緒に場面では、よく児⑨の手をひいて援助した。

国語科 「絵本づくり」

絵本づくりでは、劇づくりに入ってから紙芝居をもとに5つの場面を選び、場面ごとにお話づくりをしていった。あらすじを理解したり、自分の役のイメージづくりと自分の役の絵を見て自分の言葉で表現することをねらいとした。

紙芝居でおおまかなあらすじをつかんで、劇づくりに入っている時期であり、児童はそれぞれ場面や登場人物にイメージを膨らませており一人一人思い思いに話し、書くことがみられた。

3年生は、絵を見て自分の役の名前を言ったり、相撲の場面では「おすもう」とその場面の様子を言ったりすることがみられた。4年生は、あらすじを追いながら「いえたろうがおうえんをしました。」とその時の細かな状況を思ったままに書く児童もみられた。

右の図は、児⑩の絵本である。紙芝居の読みとりと比べると、あらすじや登場人物をつかむだけでなく、「はっけよいのこった。いえたろうをおうえんしました。」とすもうでつから比べをしている様子が伝わるように生き生きと書いている。



ち	う	ま	う	()
う	た	し	ち	し
え	の	た	が	た
い	え	た	ら	う
お	う	え	ん	を
し	ま	し	た	。
は	っ	け	よ	い
の	こ	っ	た	。
い	え	た	ら	う
を	お	う	え	ん
し	ま	し	た	。

絵本「ちからたろう」児⑩

3. 考 察

(1) 劇づくりにおける児童の感性

本学級の児童は、表1のように感性の面では「感じる」「表現する」児童が多く、その2点から考察を試みる。

①「感じる」ことについて

児⑧と児⑨は、読み聞かせの段階では、イメージがつかめにくい様子であったが、劇づくりに入って自分の衣装と登場場面の音楽が決まって学習がすすむにつれて自分の役にイメージをもつようになった。児⑧は、小道具の石と衣装に自分の役にイメージを感じており、「いたらうをしよう」と言う自分から衣装と石をもって練習の教室に向かうようになった。また、児⑨は、クリスマス会当日にぐずっていたが、劇の始まりのテーマ音楽が流れるとさっと気分を変えて劇に臨んだ。劇の音楽が劇や活動にイメージを感じて表現したのである。



②「表現する」ことについて

劇あそびが大好きな児⑦は、感じたことを自分の好きな方法ではたらきかける児童であり、劇づくりにおいて本児そのものを表現していた。ご飯をいっぱい食べて急に大きくなって回りをびっくりさせる場面では、全身に力を入れて表現をした。台詞もその日その日によって思ったように言ったりした。



いえたろう等と一緒に旅に行く場面では、「いい。ひとりで行く。」と自分そのものを表現していた。他の児童がそれでも「つれてって。」と練習の度に言っているうちに「うん。いいよ。」と流れを児⑦自身がつかんで自

分から台詞を言うようになった。

児⑩は、劇あそびが大好きで自分の役だけでなく他の児童の役や全体の動きをつかんで表現する児童である。今回は、おにの役をして激しい相撲のあとに「まいった。」という演技を熱演した。児童⑩と台詞の掛け合いをする児⑪は、児⑩に引っ張られるように動作や台詞がしっかりと表現するようになった。また、3年生と演じることが多かった児⑩は、自分だけの演技だけでなく、まわりの流れをつかみながら表現することが多くみられた。相互関係の中ではたらきかけ合いながら表現していったのである。

(2) 教師の支援について

① 児童の姿や実態に「気づく」「感じる」

劇づくりにあたって、台詞や動きを考える時、普段の児童の様子をしっかりとつかんでおくことが大切である。大人の感覚で台詞や動きを設定しても児童は活動しない。今回の劇づくりでは、実際の劇づくりをしながら台詞や動きを決定していく方法をとった。児童がその子の言葉で表現する台詞、動きたくなるような音楽を用意すること、そのためには、台詞や音楽、動きを固定的に考えないで児童の表情や動作、言葉を受けとめながらすすめることが大切であった。

② 教師自身の多様な表現方法

劇づくりにあたって、教師の活動として、基本的に児童の表現方法を指導するのではなく児童自身の表現を受けとめ、どう言っているか、どう動いているか戸惑っている時に声をかけたり動作を提示することをとっていった。

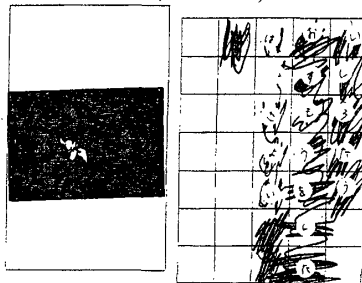
今回の劇づくりで1番感じさせられたことは、児童は一人一人が様々な表現力をもっていることであった。ちからたろうを演じた児⑦は、最初は、自分をあまりに出すあまりストーリーの展開と違った方向へいきそうであった。しかし、それは役を理解していないのではなく、その役になりきっているからこそ自分が出てくるのである。その子の表現をしっかりと言葉などで援助することがさらに表現への意欲へとつながると考えた。また、児童は互いの台詞や動作を掛け合う中で劇づくりが高まっていくことも改めて感じさせられた。

児童は、互いの言葉や動作を受けとめながら劇づくりを行っていくものであり、教師の援助は、どう動いているか迷っている時に声をかけることが児童の表現をより活発にすると考える。すなわち、教師が劇活動に固定した観念を持たないでいろいろな表現があるという多様な表現方法を身につけていくことが大切である。

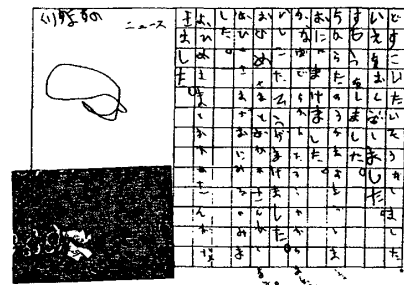
(3) おわりに

クリスマス会の翌日「クリスマス会のニュース」と題した児童の書いた作文をのせる。

児⑧は、写真を見て劇の自分の役の名前と相撲の時のかけ声「はっけよい」をうれしそうに話した。児⑩は、ニュースで次のように劇でしたことを次々と思い出して一気にかきあげた。



児⑧のニュース



児⑩のニュース

今回の劇づくりで見られたようにこれからも一人一人の児童が、日々の活動や学習を通して人やまわりの出来事に対して豊かな感性をもって主体的に活動するように支援のあり方を考えていきたい。